

「ペン画家のみた岡崎の風景 ～鳥瞰画の視点から～」

工房スカラベ
柄澤 照文



こんにちは。柄澤と言います。これが一番新しい作品で中馬のおひなさんです。足助のポスターを作っているものですから、今日は出来上がったものをひとつ持ってきました。普段はペン画も描いているんですけども、こういうイラストみたいなそんなものも描いたり、小さな紙粘土の人形を作ったり、そんな事をして、なんちゅうかな、たわいない生活をしている者です。僕はあんまりこういう皆さんの、たくさんの方の前で話すという機会がないものですから、上手く喋るとか、上手く伝えられるように話が出来ないうちかもしれませんけども、よろしくお願いします。その変わり原稿はいっぱい用意してきましたので、読む事が多いと思いますが、そうやって聞いて下さい。お願いします。

1. 池袋の「人世横丁」

岡崎の話の前に僕は去年の末は、東京の池袋の人世横丁という小っちゃな横丁で絵を描いていました。そこは池袋駅とサンシャインの間の小っちゃな路地を入った横丁なんですけれども、周りに銀行が建っていたり、生命保険会社があって、その下に夜はまさに上から見るとちょうちんあんこうがビルの谷間にうずくまって、提灯の中に群がっている小魚を食べているような、小さな三角形の横丁なんです。50軒余りの小さな横丁なんですけれども、その三角形のちょうど頂点みたいな所が入口になって中にお店屋さんが固まっているんですよね。若い人、それから脱サラとか早期退職されたサラリーマンのおじさん達が元気いっぱいやっている店があったり、ひとつ面白かったのは70歳とか80歳ぐらいになったおばあちゃんがやっている小料理屋さんのお店がこの中にたくさんあるんです。2階に洗濯物を干してあったり、入口には植木鉢が山ほど積んであったりして、昼間だと買い物に行ったり、ゴミ出ししたり、立ち話をしたりする姿があったりして、やめちゃってもそこにそのまま居着いて生活している人もいたりして、本当に生活感のある飲屋街という感じなんですよね。そこは何故そういう横丁が出来たかとちょっと聞いたら、戦後池袋の駅前で屋台をやっていて、その都市計画というのがあった時、立ち退きを求められて、昭和27年頃、協同組合を作って礎を作ったそうです。だからもう55年の歳月が経っています。その後高度成長という華やかな時期もあったんでしょね。青江三奈の「池袋の夜」なんていう歌がありますけれども、まさにそのような世界があって、彼女も来た事があるとか、未だにそういう芸人さんとかの色紙なんかたくさん貼ってあります。芸人さんが来たり、それからそういう雰囲気が好きだという方達、ファンがいっぱい来て、すごく好まれている場所なんだなと思って座っていました。ハリウッドからも何か映画の撮影隊が来て、その場所を使ったシーンを撮るんだって大騒ぎしていました。この路地と狭い空き地と飲み屋が並んでいる空間が55年という時間を経て作り出したとも、にじみ出てきたとも言える空間に身を置くと、ただ感想や追憶の枠に留まらない何か面白さがあるような気がします。区分け出来ないいろんなものが入り交じっているという意味では、名古屋大須商店街や足助屋敷

の施設の中でもそれがひとつの魅力になっています。それは子供の頃の世界にもそういう感じがあったような、そういう思いをしながら新幹線に乗って帰って来ました。

2. 子どもの頃の思い出という風景

次に子供の頃の思い出という風景について、ちょっと話します。昭和24年、だから1949年ですよね。宝飯郡の赤坂という所で生まれました。親父が名古屋で教員してて、疎開先だったという事なんですよ。覚えている事と言えば、ほとんど覚えてなくて、写真で僕が上半身裸になって三輪車に乗ってお寺の境内で写っている写真があって、きっとそのような事を毎日やっていたんだろうと思いますね。お寺の女の子にちょっといじめられたような気がするんですよ。そんな思い出があります。それから僕が3歳の頃に岡崎に引っ越して来ました。引っ越してきたのはモダン通りの所に、磯貝彫刻店ってありますけれども、そのちょっと上の辺りです。ちょっと覚えているのは夕方頃にお袋が、夕飯の支度をしなくてはという事と、赤坂はちょっと狭い道なもんですから、モダン道路が物凄く広い道に、しかも柳の木が街路樹として植わってというのが、まあ不思議な所だなという、なんかちょっとそんな感じが最初の岡崎の僕の印象なんです。その後、波トタンから雨だれがポツポツ落ちてくるのをずっと見てたという思い出があります。その頃の唯一の記憶ですね。

僕はその後また1年くらいして、六供新町という所に引っ越しました。僕が幼稚園に上がる前です。そこは石屋さんの多い町で子供も多かったです。だからまたいじめられましたけれども、なんか必至になってみんなの後をくつついていく。あっちへ行けばついていったし、こっちへ行けばついていくという、そのような事で何とか必至に相手してもらおうと思ってついて行きました。その頃からの話をします。4歳から小学校6年生の11歳ぐらい。だから年別で言えば1953年、昭和28年から1960年、昭和34年辺りまでの戦後復興からの高度成長が始まるぐらいまでの話です。子供の頃の風景といえどもっぱら遊びの思い出という事になります。それをひとつひとつちょっと取り上げながら話をしていきたいと思います。まず、「ボンツク」です。「ボンツク」という言葉もご存知かどうか分かりませんが、僕たちは六供新町に住んで、伊賀川を僕たちは浅川と言っていたんですが、そこに行って子供たちが大きい子や小さい子まで、タモとかバケツを持ってずっとみんなで行くんです。それでフナとかザリガニを捕って来たんですけれども。僕はタモとかそういうのを持っていなくて、大体バケツを持っていつもお兄ちゃんたちの後をうろろしているのが専らでしたね。それから町内に沼のような小さい池があって、そこでザリガニ釣りちゅうんですか、それが一番僕が良くやっていたんですけれども。ザリガニのしっぽを切って、中の白い肉を出して、それに紐を付けて池に入るとザリガニが引っかかってくるんですよ。お兄ちゃんたちになると蛙の皮をひんむいて、それに紐をくっつけてそれをやる。それが物凄く良く釣れるんですよ。でも気持ち悪いからやっぱり僕は出来なかったです。学校から帰るところでそんな事やってたなと思います。それから近所の小高い丘に行ったら、蝉とか虫とかトンボなどを捕っていました。それから「ペッシャン」と「カッチン」。この言葉も面白いですよ。下に叩き付けるから「ペッシャン」、それからあたるから「カッチン」と言うんでしょうか。「ペッシャン」って他の所では何というのかわかりませんが、メンコとかいうも

ので、厚紙に印刷してそれを地面に置いて、こう自分が叩き付けて、パンとこうひっくり返ると貰えるという...「カッチン」というのは相手のビー玉を打つと貰えたり、それから輪があってその中にいっぱいカッチン玉を入れておいて、それで自分が親玉を持っていて、打つと自分の玉も出て、中に置いたのも出て貰える。親玉が中に入ると「インチョ」と自分たち言うんですよね。不思議な言葉を使っていたなと思うんですけども、ああいう事をよくやっていました。

良いですか、こんな子供の頃の話をしていて。飛行機からの広告ビラのビラ拾いもしました。軽飛行機が来て紙をパーッと飛ばすのでそれを拾うんですよね。白い紙はたくさんあるので色の付いた紙を欲しいんですよね。それを拾いに僕たちは遠くまで行っちゃったちゅうのは、何か凄いですよね。そんな事を思いました。

それから「チャンバラごっこ」を僕たちは良くやっていましたね。野原に草が生えて、その堅いような茎を使うんですけれども、それでチャンバラごっこをやるんですね。切られても10数えると生き返るといふ、いいですよね。これからの世の中では、10数えると生き返ってくるのは迷惑かもしれませんが。当時は東映映画にスターが居ました。「旗本退屈男」の市川右太衛門、大好きだったんですよね。それから片岡千恵蔵とか中村錦之助、大川橋蔵、それから凄い恰好良かったのが山城新伍の「白馬童子」、物凄く恰好良かったです。それから大友柳太朗、それから「鞍馬天狗」の嵐寛寿郎、それから「眠狂四郎」の市川雷蔵、僕たちはその刀みたいなものをこうやって円月殺法ですかね、あれをやたらとやっていましたね。そのようなもの、子供の頃チャンバラごっこ。

それから「戦争ごっこ」といふのは体験ありますか。僕たちは近くの山の中腹にやっぱり陣地といふのを作るんです。2箇所くらいあったんですけれども、そこで小屋を作ったり、みんなで行進したり、それから走ったり。それから大砲の弾といふ泥んこを持ってきて、こねて、玉をこういっぱい作るんですね、泥んこの。それで高い所から通行人に投げるんです。そうすると怒られるんです。それで逃げるんです。何かそんな繰り返しやっていましたね。それから階級がやっぱりちゃんとあるんです。上級生が大将とか少佐とかいろいろあるんですけれども、僕は万年二等兵なんです。出すと青竹でお尻殴られるんです。それは本当に嫌だったです。一人壺焼き屋といふ芋屋の息子が居て、ここに居ないでしょうけれども、一人彼が差し入れするんです。そうすると二等兵から上等兵とか出世していくんです。彼はきつと出世して終わる、本当にそんな事を思いました。

それから「コマ回し」。「コマ回し」といふのは瓶の蓋にコマを乗せて、コマがまわっている間は移動できたりするんですが、それで鬼ごっこするんです。僕は瓶の蓋にコマがのらないんです。どうするかといふとそういう子はコマが回っている子の紐をつかんで一緒に逃げていました。それから公園で缶蹴りをやったり、かくれんぼをやったりしていましたね。

それから「粘土細工」。これは分かりますか。付属小学校の東門辺りでそういう業者が店開いて、型と粘度と色粉を売っています。品評会があって色の付け方の上手い子とか、形の良く出来た子は賞品としてもう一個とか粘土がもらえるんです。僕

は大きな型を持ってなかったんです。四角い大きな型は有利で、上手く色の付いた子はそれをもたらるもんですから、なかなかそれが出来なくて羨ましかった。

それからその当時、岡崎公園、まあ他にもいたのかもしれませんが、「傷痍軍人」という人がいましたね。白衣を着てアコーディオンを鳴らして募金活動をしている。その人達の姿が可哀想で可哀想で。一度家に帰ってお金を取って戻って来たような思い出があるんですけども、夢かもしれないですけどもね。何かそんな思い出があります。

それから「紙芝居」。よく小さい頃は近くの公園にも来たんですけども、あんまりお金がなくて遠くから見ていただけだと思うんです。たまにお小遣いを持って行き、見る機会があると、ただおまけとして塩昆布みたいなものとか、練り飴とか、それから小さい白い板だと思うんですけども、その中をくり抜くと、何というの、5円玉とか10円玉がもう一つ貰えるんですよ。それが大体壊れるんですよ。何かそんなのを貰ったという思い出だけで紙芝居の内容は全然覚えてないですね。

それから「サトウキビ」。八百屋さんの横にいっぱい置いてあって、あれをお袋が買ってきて、短く切って腰のズボンのバンドにいっぱい差して、遊びに行くと、それをこう歯で剥いては中の白い汁みたいのをチュッチュッ吸って、筋みたいなのが残るから地面にペッペッと吐いて、そんな事がありました。

それから「薬売り」というのが来ていましたね。玄関に薬のいっぱい入った行李を置いて、柳行李ですか、あの中から出して、赤い箱に薬を移し替えて、終わるとおまけといって紙風船をもらって、なにか一つか二つ遊んだような思い出があるんですけども、あとはもう全然記憶がないんですね。

一番強烈な思い出を話しますと、「駄菓子やさんのくじ引き」です。よく紙が一束になっていて舐めて当てるやつです。ある時あと残りのクジが5、6枚なんです。残っておる景品が特等、一等、三等ぐらいのブリキ製のピストルで凄く良いものがいっぱい残っているんですね。どうすると思います。急いで家に帰って台所にあった小銭をつかんで、もうドキドキですよ。全部自分のものだと思っているから、あとね。一枚目ひいたんですよ、舐めたらス力なんですよ。二枚目を舐めたらまたス力なんですよ。結局全部ス力なんですよ。もうね、おばちゃんが残念だったねって言うだけなんですよ。残念じゃないんですよ。残ったものはどうするんだと思うんですよ。本当にその不思議さと怒りというんですか、あれが本当に未だにこうやって語れるくらい凄く強い印象があります。本当にあれはどうしたんでしょうね。

それからよく夏になると広場で「相撲大会」がありました。体の大きなお兄ちゃんとお戦する事になって、もう負ける事は分かってぶつかると、お兄ちゃんが僕を抱えたまま出ていったんですよ。そうしたら勇み足という事になったんですよ。勝っちゃったんですよ。勝つとノート一冊、負けると鉛筆一本、本当に嬉しかったというそんなことを思い出しますね。

それから広場では「野外映写会」というのがありました。夕方になると真ん中に白布が設けられて、夕方になるとゴザとか座布団持って近所の人が集まってきて、僕達も座って見ているんですけども大体飽きちゃうんですよ。飽きちゃうとどうするかというと幕の裏側にいてこう見てるといふか、何にもしていないといふか、ただ時間を無駄に過ごしているというような、そんな事をやっていたですね。

小さい頃、伊勢湾台風がありましたね。あの時は本当に怖くて、小さい近所の小屋の屋根が二つ飛んできて、一つは家の屋根に突き刺さって、もう一つは硝子窓を破って家に飛び込んで来ました。小さかったからあんまり記憶がないんですが、多分親父か兄貴が、多分ですよ、ロープで家の中の柱と縛り付けてそれで一晩過ごして、台風が明け方、いつ頃上がった分かんないですけども、上がったあと近所の子供達と壊れた家を見て廻るといふ、本当に今からすると酷いですよね。そんな事をしてました。小さい頃はそんなような遊びが僕の風景でした。

小学校の高学年になると、もう「ソフトボール」が盛んになってきて、学校に行っても、町内に戻ってきてもほとんど「ソフトボール」。それからもう一つは「テレビ」ですよ、テレビが段々普及し始めてきて、近所の駄菓子屋さんにテレビが置いてあって、お店屋さんですからただ行くわけにはいかないんですね。一杯5円のせんじ氷を買うんですよ。そうすると縁台があって、ゆっくりせんじ食べながらテレビが見れると。あと家の前に八百屋さんがあってそこが早くテレビを入れられたものですから、日曜日の朝になると行って見てました。僕が今記憶にある番組というのは「てなもんや三度笠」それからその後に佐々十郎と大村崑さんのやっている「ミゼット」の宣伝ですかね。それから「怪傑ハリマオ」、それから「プロレス」ですよ。力道山が空手チョップやるとだいたい勝って、吉村が出てくると負けるんですよ。何で負けるのにタッチして出てくるのかなと思うんですけども、あれが不思議でしたね。あとは「豊登」っていうパンパンと胸を鳴らす人とか「ブラッシー」とかそんなプロレス中継。それから好きだったのは「琴姫七変化」って、松山容子さんという人がボンカレーの宣伝をやっておられた、あれは好きでしたね。それからスティーブマックイーン「拳銃無宿」ですか、ちょっとこう銃のちょっと長い奴をこうやる番組。それから「ララミー牧場」とか「名犬リンチンチン」とかそんなものをちょっと覚えています。

あとは中学校、本当は僕は梅園小学校を出て甲山中学校へ行く予定だったんですけども、学区編成か何かあって、僕達の時から葵中学校になりました。だからみんな小学校の友達は甲山中学校に行っちゃいましたから、あんまり友達もいなくて、地域という所から離れて、学校の友達との付き合いばかりになっちゃいまして、地域という世界から離れました。だから小さかった子供の頃の遊びは、道路とか路地とか家の中、川、田んぼ、山などあらゆる場所と天気、時間、メンバーの数に応じて子供たちの中から何をやるのか遊びを決めたり、ルールを作ったり、そういうふうに変えながら夢中になって遊んでいた。それも小さな子から中学生までという群れをなして遊んでいたというのがその当時の思い出です。そこからしばらく僕も岡崎を離れる事もあったですから、岡崎という町に関しての関心を持ったのはそれから20年後になります。

3. 都市研究グループ 岡崎

それは仲間で都市研究グループ岡崎という仲間を作って、みんなで勉強会とか話し合いをした事です。今からその事の話をして。動機っていうのはちょうど248号線のバイパスが工事が始まったり、開通に伴っていろんな店がだんだん出てきて、岡崎の町が本当に少しづつ変わりました。それと共にその当時は八帖とか板屋、それから竜美ヶ丘、国鉄駅周辺などの大型の区画整理、北斗台とか日生団地とかの大型住宅地がどんどん出

来だして、岡崎のあちこちの風景がどんどん急激に変わったという時期でした。建築に携わっている友達がこんな事を言っていました。「もうみるみる町が変わって行くんですよね。小さい頃フナをとったりドジョウをとったりした田んぼが目の前で埋め立てられていく。良いとか悪いとかよりあんまり急なので不安になってしまう。自分達の町を住んでいる自分達で考えてみたかった。」そんな事で話し合いが始まりました。だいたい週一回僕の家を集まって話し合いが始まったんですが、メンバーというのは30歳前後、職業は設計士とか公務員とか高校の先生、石屋とか主婦とか漬物屋とか、ペンキ屋などだったです。

話し合いはやっていましたけれども、もう一つ記録もよく取りました。国道一号線の拡幅工事があって、みんな壊れちゃうという事で、八帖から田町の辺りにかけてずっと連続写真も撮ったり、それから板屋町から八帖の旧東海道ですか、本当に古い町並みがある所の連続写真を撮ったり、それから旧国鉄駅の西と東も区画整理があるという事で、その路地とか看板とか格子戸、煙突など古い町を物語る様々な最後の写真というのか、路上観察みたいな事ですけども、そんなものを撮ったりしました。それから板屋町の花街の中にあった建物が一軒壊れるという事で中に入れてもらってその平面図を調べたり、それからビデオとか写真に撮らしていただきました。その当時、僕が『岡崎文化』という本の中で自分の考え方をまとめた文章がありますので、それを読ませてください。ちょっと長いですがけれども。

<町並み風景>

「最近、名古屋の岡本氏から「風景」について考えてみようという提案があり、岐阜、桑名、津島、岡崎、名古屋などの友人が集まって話し合いが始められた。」これは名古屋の野外活動研究会といって岡本信也さんと靖子さんという方たちがやっているグループで、路上観察を中心に活動しています。「風景論に関しては、様々な角度からの考察がなされているのだが、いざ、「風景について語れ」となるとなかなかむづかしい。そんな中で「風・景」を、見えないものと見えるものとの構成された世界であり、時間と空間が交錯して織りなすものと考えてみた。今現在目に映るものや、音、臭いなど五感に訴えるものと、すでに失われた過去や、次に現われる未来とを重ね合わせることで、風景は奥行きと広がりを見せる。ふだん何気なく見ている周辺の風景も、見方を一考すれば、楽しい新しい発見があり、町を歩くのが楽しくなる。」すみません、ちょっと眼鏡。もう58歳だもんですからだんだん目が悪くなって。「中岡崎にある我が家から国道248号線を横切り、板屋町の家並の中に入っていくと道幅は狭くなり、時代を経た家々が両側から覆いかぶさるように並ぶ。置屋、料理屋、雑貨屋、床屋、食堂、美容院、魚屋、洗濯屋、薬屋など続く中にも、新しい建物や駐車場、空き地となった所もある。ほとんどが狭い間口と奥の深い間取りのため、まるでヒラメのような形で、家と家とがべったりくっついて建っている様子が、一軒が壊れるとよくわかる。むき出しになった隣家の荒壁や柱が痛々しく、かといってトタン板を張った姿もぎこちない。かつてここは東海道筋の町としてにぎわいをみせたが、国道一号線の開通で、裏通りとなり、今は生活道路となっている。ただ昔から花街だったため、家の造りや通りの雰囲気には華やかなりし頃を忍ばせるものがある。唐破風の玄関、細工を施した漆喰の戸袋、透かし彫りの手摺、円い軒燈、格子、褪せた薄紅色の壁、さんざめきが聞こえてくるようだ。プリ

キの郵便受、竹筒の旗差し、軒裏にかけられた大きな破魔矢弓、屋根神らしき偶像、古い町は何を見ても興味は尽きない。これらを作った人、使った人、ここに生きた人々に思いをめぐらせながら歩くと、また違った世界がひらけるようだ。

旧東海道を板屋から田町へと北に向かうと国道一号線にぶつかる。大型トラックや乗用車がすざましい音を立てて黒い排煙をふりまきながら次々走って行く。分離帯の金網も両側の家々も黒くすゝけ、雨戸やシャッターを閉めっぱなしのところも多い。この通日も拡張されるため、除々に順次家が壊され始めている。今でこそ古い見栄えもしない建物であっても、新しい交通路への期待感をもって造られたことだろう。大構えの家も見受けられるし、商店が多くアーケードも一部設けられている。道の広さをもて余す程だった開通当時から、この車公害の原点のような通りに、住むに耐えられない環境になるうとは想像もつかなかったであろう。より快適に、より便利にと町が整備されてゆくのは必要な事かもしれないが、日に日に崩れていく家並みを眺めていると、せめて竜城橋西の伊勢屋酒店と森田大工道具店、三階建ての木造家屋など残ってくれないかと思ってしまう。

当初は人目をひいたであろう建物が、今日また一つ壊される。時代が移り、或いは老朽化して、いずれは消えていく運命にあるとはいえ、毎日そんな光景を目のあたりにすると心が痛む。ぽっかり空いたその跡には全く別の世界が生まれる。今までそこにあったもの、いつでもそこにあったものが失くなり、それによって見えなかった様々なものがあらわになる。はるか向こうまで見通せる空間にハッとすることもある。間もなく青いシートがかけられ工事が始まり、やがて新たな装いをした商店や住宅が姿を現す。そこにあったかつての古い家などは、いずれ記憶にも残らぬ過去のものになってしまうだろう。

日頃見慣れている風景というのは、自然の変化はもちろん、突然家が壊されて失くなったり、いつの間にか大きな建物や道路が出来たりすると、初めは驚き関心を持つが、いつしかそれも見慣れた風景になっていくという繰り返しでもある。身近な風景はとりわけどうという事もない代り、意識的に眺めるようにしていると、その変化はとても気になる。たとえ一時であろうと岡崎の町にあり、失われていくものは何らかの形で「記録」しておく必要がありはしないだろうか。そうすることが新たに生まれてくる岡崎の町並に「今日性」の意味をより強く問いかける事になるのではと思う。それは町や建物が自然発生し、自壊したのではなく、人の手によって生み出され、壊されていくのであるから。」

そんなような事を考えていました。スミマセンね、読んでたりして。その後僕たちはこういう記録をするとともに提案という事もしました。それは緑と水の流れを結び輪にしたらこんな散歩道が出来ましたといった「竜の散歩道」です。1982年の4月に僕たちが「ラ・ポーラ」っていう、今の「まる庄画廊」のところでその展示会をしたのですが、コースは循環しているんです。例で言うと岡崎公園を出発して、乙川沿いを歩いて、それから中央緑道に出て、中央緑道からずっと上がって籠田公園に出て、籠田公園から市民会館の横を通して、浄水場の横を通して愛宕小学校の横を通して伊賀に出て、伊賀の八幡さんまで出て、そこから柿田川緑道、伊賀川沿いをずっと南下して岡崎公園に戻るという、そういう僕たちが勝手に「竜の散歩道」といってやったんですけれども。普

段の生活道路に使っているものが散歩道という形で利用出来ないかという事をちょっと提案しました。久しぶりにこの前、お正月のちょっと後にそのコースを、提案してから今25年経つんですけれども、それを歩いてみました。あまり変わってないという感想でしたが、少し大きな変化と言えば、一つは公園と殿橋の間に2つ大きなマンションが出来ましたよね。あれとそれからスポーツガーデンが壊されて、もうじき図書館が出来るという事で今工事中という事。それから名鉄ホテルとか中日文化センターが入っていたメルサも壊されてもうじきマンションが出来ますよね。そういう事は大きいなと、大きな変化があったんだなと思います。それから小さな変化というのもちょっと所々にあって、これは時代をよく表すなと思ったんですけれども、竹千代橋のたもとに「純情きらり」のロケ地の看板と、寺嶋しのぶさんの手形のモニュメントがあったり、二七市の所に前はなかったんですが大きな看板が出来たり、それから柿田橋のたもとに「東海道二十七曲」の案内石柱があったり、あとはもう本当に個々の家が古い家が壊されて駐車場になったり、それから新しく建て替えられたりって、そんなものが小さな、ある意味小さいとはいえないでしょうけれども、変化として感じました。

その「竜の散歩道」の提案というのをもう一回読み直してみたらこんな事を思いました。この提案は開かれた町を求めています。人の触れ合い、市民が本当にくつろげる場、路上で老人や子供たちが活動出来る場、夕涼みや立ち話をしたり、路上で遊びに興じる姿、そういうのが何か実現されるようになるといいな、そんな散歩道が出来るといいなという事で提案したものです。それが住む人々と町を歩く人々に快適さとゆとりをもたらし、豊かな都市空間づくりに繋がる。しかもそれが次の世代へ受け渡す事ができる都市づくりになるんじゃないかということ提案したんですよね。ちょっと歩いてみて現実はどうかというとなますます閉鎖的というか、安心とか安全とかが無くなってきており、歩いて見るとステッカーや立て看板に防犯の内容も多くて、用事もなく歩いていると怪しいという、ちょっと風潮が強くなっている感じがする。互いに監視の視線であったり、声を掛けない、それから目を合わせない。そんなような場面が多く見られる。僕が歩いていたせいかわからないですね。ちょっとこの断定出来ないところもあるんですよね。ちょっとこの雰囲気ですから、やばいというのものもあるかもわかんないですね。だからそれはこう言い切っちゃあいけないかもしれないですけども。路上空間で温もりとか笑い声とか、親しみとか、心遣いというものを求めていたのに、何かますますそこから離れていくという、そんな印象を受けました。ただこう歩いてみて、そうばかりではないんじゃないかと感じたのは、愛宕小学校の辺りを歩いている時に、犬を連れて散歩している男の人が、「おはようございます」って声を掛けてくださったんですよね。そうするとね、ほっとするというか、それとともにその場がすごい温かい風景に変わるんですよね。その上、なんかこれは防犯としてもとても意味ある役割をしているんじゃないかって。そういう事で何か路上の挨拶という事が、これからもっと考えられてもいいんじゃないかなとふと思いました。

「竜の散歩道」の循環型の散歩道というのはちょっと調べてみると以前にもこういう提案がされた事があるんですよね。それは戦後、昭和29年11月に発行された『岡崎戦災復興誌』という、分厚い本があるんですけれども、その中に昭和27年7月29日、東海愛知新聞の記事を載せてあって、岡崎の都市部を語る座談会というのがあります。そ

の中に岡崎の楽しい夢のテーマという事で、こんな内容が載っていました。「みどりや」という店の松井弘さんが「高級商品が並ぶ東康生、本町は銀座。伝統ある松応寺は浅草的な盛り場。文化住宅を抱える明大寺は新宿といった、各々その性格を強調すればこれを結ぶ散歩道のある岡崎の魅力は倍加すると思う。」この間に公共施設も欲しいといっているんですね。それから学芸大学の杉山新樹さんが、「私は岡崎公園の他に今ひとつ菅生川の上流、高岩付近に公園が欲しい。現在の堤防道をドライブウェイに、堤を散歩道に、さらに北の釈迦堂、種鶏場、八幡宮を結んだ循環風致地区が欲しい。」これは多分東公園と今の婦人会館のある石神とそれから伊賀八幡宮とだいたい似たコース。ちょっと大きいですけれども。更に杉山さんは「結局都市美という事は様式が材料や技術的に狭い文化圏で賄われていた時代にはそれが繰り返し洗練される事によって形成されたが、個人が世界のどこの様式でも自由に取り入れる事が出来る近代では混乱を招きやすい。美しさを創造し維持していくのは結局人間の知恵以外にはない。」と。いつもその知恵というものが各時代問われてるんだなと思いました。

ちょっと余分ですが、『戦災復興誌』の中に昭和24年の岡崎市に対する世論調査というのがあったので、これが面白かったのでちょっと紹介します。岡崎は戦後何が良くなったかについてアンケートの上位から答えがあるんですけども、1・道路、2・衛生、3・町が綺麗になった。4・道路が綺麗。それから戦後悪くなった事は何ですか。1・青少年の心の悪化、2・思想が悪い、3・犯罪が多い、4・道路の補修が悪い。それから復興に何を望みますか。1・遊び場を、2・図書館を、3・校舎の増設、4・市民住宅の増設、5・道路の清掃と改修。それから岡崎の美点、良いところは何ですか。1・人情が厚い、2・気候や風土が良い、3・天災が少ない、4・心優しい、5・物価が安い。何かやっぱり心の問題と町の環境の問題というんですか、こういうものにやっぱり関心が高い。それだけ変化がはっきりしていた時にアンケートをとったという事なんでしょうけれども。これがだいたい自分が風景という事に関して、今まで関わってやっていた事です。

4. ペン画を書きはじめたきっかけとペン画で描いた岡崎の風景

次に一応僕はペン画家みたいなものというか、ペン画を描いてそれで風景というものに関わったものですから、何故ペン画というものを描き始めたかというきっかけとペン画で描いてきた風景についてここから話をします。ここからちょっと昨年11月に図書館にみえた方は同じような話になるかもしれませんが、そのところを勘弁してください。僕がペン画を描き始めたきっかけは女房と始めた「おかざきしんぶん」というミニコミ紙を出したのがきっかけです。なんでそのしんぶんを出すようになったかという、しばらく他の所にいて帰ってきた時に、ちょっと絵の教室も手伝ったんですけども女房と結婚する事になりました。その時に二人で何かライフワークみたいなものを持ちたいという事で、地域の事を調べようとして、いろんな人の話を聞きたいという事と、自分がここ岡崎の地に住み続けていきたいという姿勢と、それから常に情報を発信するぐらいの気持ちを持ち続けたいという事で、個人的な動機としてひらがなの「おかざきしんぶん」というのを発行しました。第1号は1978年、昭和53年、僕が29歳の時です。印刷屋さんに出すお金がないもんですから、ガリ版刷りで岡崎の地名と創刊の辞とお正月の雑感で、創刊の辞では身近な出来事や身近な人々の発言考えを取材し、この岡

崎で生活している事の意義を見つめていきたいという、すごい真面目な気持ちでこのしんぶんに向かいました。

次の第2号は舞木町に取材に行きました。そこに行ったというのは岡崎の代表的な正月行事として、「デンデンガッサリ」というお祭りがあるんですよね。1月3日に山中八幡宮のお田植え神事ということで、牛の背中に鏡餅を乗せると余りの重さに牛が倒れてしまうのですが、それは豊作祈願という事ですと続けられているお祭りです。それを見てみたい、取材するという事で行きました。それから明治15年に出された「愛知県地名集覧」というのがあるんですけども、そこに明治の頃の額田郡とか碧海郡の小字名というのがいっぱい載ってまして、今の町字コードを調べるとかなり小字名というのがもう何丁目とかいう形で少なくなっているんです。その舞木町の中でなくなっているかもしれないという小字名がどこの場所だろうかという事とか、それから小字名の名の由来というんですか、そんなものを調べて見たいなと思い、それで絵地図を作ろうという事で回りました。だからこれは多分既に書かれた資料なんですけれども、例えば小字名で「茶屋河原」というのがあって、まだ山綱川の川幅が広がった頃には河原が出来ており、旅人が茶を飲んで休んだところからこの名が付いたと言われているというようなそんなようなところを、ひょっとしたらこの辺りかもしれない、あの辺りかもしれないと言いながら散策するというのがすごく面白いんですよね。地元の人にも「こういう地名の付いたところありませんか。」って聞いて歩くというのは違った意味での町への関心の表し方、なんていうのかな記録の仕方だと思ってやりました。

それから3号は中町という町を取り上げました。そこは僕が当時住んでいたものですから、自分の住んでいる周りの事を知りたいと思って関わったのです。ちょうど中町七丁目というのが四角に区切られた道路の幅一画で、ちょっと面白いな、なんだろうなと思っていたら、そこが遊郭があったってということで全く知らなかったですから、不思議な一画だなと思っていました。大正12年、伝馬町にあった東遊郭が風紀上の理由でここに移転、開業。幅一間ぐらいの堀に囲まれた中に33件の妓楼があり、その周りに置屋とか揚屋とか商店とか民家が軒を連ねていました。東岡崎から青バスというのが走ってきて岡崎の一大歓楽地だったということですが、今は全然そんな面影ないです。昭和19年三菱の軍事工場の寮として軍に買い上げられ、板屋町に18軒集団移転し、それから昭和20年4月に岡崎の空襲で一帯は焼け野原になった。手がかりも何も無かったものですから、牧野さんという方が当時の家並み図を調べて来て下さって、ああこういうふうになってたんだ、って分かりました。そういう事を言わなければ、家並み図も出来なかったんですけども、今は大門通りという小字名と当時区画された道路だけが残っています。だからほとんど当時の面影はありません。やっぱり調べる事しかその風景がよみがえってこないという事ですよ。

それから4号というのは、次に僕は中岡崎町に家を造りましたから、板屋町の中をちょっと歩きました。そしたら町の真ん中に岩附定五郎さんの大きな石碑があって、そこに碑文として「大正12年から昭和7年の間、板屋町の南の方、25,000坪の耕地を埋め立てた」という事が書いてあったんです。あと取材して聞いたら、板屋町の南方が10メートルぐらい低い土地になっていて、そこが田んぼや畑や湿地だったので、そこを埋め立てて、埋め立てただけでは地盤が緩いもんですから、草競馬や博覧会、自転車競

争をやったり芝居小屋が建てられて地盤を固めた。それで今のような良好な住宅地が作り出されたそうです。この方は明神橋の仮設や愛電西岡崎駅の設置に尽力されたそうで、こういう形で歴史っていうものは作られ、この町という風景が作られてきたんだなと感じました。何かこうきっかけというものがある、と少しそこが突破口になって、見えてくるものがあるなという事を思いました。

それから次に八帖を調べました。八帖はカクキューの早川勇治さんっていう方が梅園町にみえたんですけれども、そこに取材に行くとエレクトーンを弾いて下さって、一緒に歌を歌ったりして。岡崎の経済界、とりわけ額田銀行が倒れるんですけれども、その当時の話なんか伺ったり八帖気質っていうのか、八帖の人達が康生とか伝馬に行くというのは空町へ行くとか、町へ行くと行って、八帖というのは如何に田舎だったかという話を聞かせていただいたりして、早川さんと良い時間を過ごさせてもらいました。それから大工の杉浦義太郎さんという方が、この方は92歳だったんですけれども、八帖の土場の話とか、明治天皇と船橋、それから矢作橋のガス灯の話、それからその方の大工の修行をした頃の話とか、不蔵庵というお茶席があるんですけれども、それと甲山焼の話とか、幅広いそういう話をずっと聞かせてもらいました。明治33年の頃、そのおじいちゃんが小さかった頃の八帖の家並み図が、それが頭の中に全部入っていて、立て板に水という言い方がありますけれども、ずーっとこう言われるんですよね。それを僕たちが記録していくんですけれども、そういうすごい記憶が残っている人の話を頭の中から文字に起こして、これは本当に良い記録が取れたなと思いました。そのおじいちゃんは、毎日ひとつずつ何かを作るという事を心掛けていて、仏像を作ったり、箸を作ったり、それから絵を描いたり。何か早川さんにしろ杉浦さんにしろ、二人に共通しているのは常に五感を働かしている事と、それから八帖の町や歴史をすごい大切にしているなという事でした。八帖の町の印象なんですけれども、やっぱり矢作橋というのが大きくて、あそこは矢作川と東海道の十字路、船で矢作川をずっと塩とかいろんな物資を乗せて上がっていく交通路と、東海道を通過して矢作川を渡っていく物資の交差点っていうんですか、そういう意味ではあそこら辺は大事な場所だったんだろうなって思いました。だから現代でも何といひかな、往還通りは八帖の明治村と言う人がいたくらい、僕が取材したときはすごく雰囲気のあるところでしたが、もう随分変わりましたよね。「純情きらり」の風景でも随分変わったと思うんですけれども、僕たちが取材した頃はすごく雰囲気のある場所でした。八帖に関しては歴史も自然も豊かで、それが静寂という中に色濃く残っている町の雰囲気、そういう意味で何かとても印象の深い所でした。

ここから第6号で僕がペン画を描く事になります。すみません、長い退屈な時間を過ごさせてしまってごめんなさい。初めてここで僕はペン画のスケッチというのをやりません。これは女房がちょっと体調を崩して、板屋町の取材をしてたんですけれども、編集が出来なくて板屋町の風景を描きました。初めて絵を人前で描くもんですから、恥ずかしいですね。だからゴミ箱があればその横、電柱があればその横とか、雨の日とか、それから朝早くこう座っていると、パーっとシャッターが上がる。僕が座っている。何かキャーッというような声が聞こえてきたような、そんな風にスケッチを始めました。とにかく板屋町は当時印象の深い建物がたくさんありました。壊れちゃったんですけれども「双龍」です。あそこは大きな瓦屋根があって、和風の木造でしかもダンスホ

ールという、あれはすごい強烈な建物でした。それから軒下に魔よけに使う破魔矢弓というんですか、あれがかかった煙草とか雑貨とか、貸本屋をやっていたお家があったり、いろんな店屋さんがあったり。それから食堂の名前でも「日の丸食堂」という、今何かちょっと良いのかなと思うような名前ですけれども、良いなと思いましたね、「日の丸食堂」。そこのオムライスが僕は好きだったんですね。よくそこから出前を取っていたんですけれども。玉突きや梅屋の看板、それから二階の手摺も名前が彫り込んであったり、その意匠が素敵だったですね。それから漆喰の戸袋、これは凄いものがありました。浜松の方から来てこれは造ったんだよという話を聞きましたけれども、そんなものがあったり、二階の軒下の所には大きなぼんぼりのような電灯があったり、赤い色の壁、それから狭い路地。僕が建てた家の裏側は検番といって、芸者さん達がお稽古する場所なんです。だから家で横になっていると三味線の音が聞こえたり、太鼓の音が聞こえたり、そんな良いところだなと思いましたね。ペン画のスケッチというのは、写真とはちょっと違って長い時間僕がそこに座るんです。そうすると座る事によって音が、例えば戸を開け閉めする音とか、それからその場の雰囲気とか、それから会話とか、そんなものが聞こえてきて、描いている風景と共にそういうものを、スケッチの紙の裏に文章を書いておくんです。何時何分豆腐屋さんが通って行ったとか、何時何分子供が通って行ったとか、こんな事話しかけてきたとかずっと書くんですけれども、絵に現れないものがいっぱい座っていると聞こえてくるんです。耳を立てると僕は言うんですけれども、そういう絵の描き方はこの時に覚えました。ペン画というのはすごく面白いというのか、そう思って。よく写真を撮ってきますけれども、それでは何もならないもの、時間というものが織りなすものがたくさんあります。しかも「板屋 20 景」というしんぶんを出したら、長崎とか横浜とか全く知らない人からそれが欲しいという話があって、絵の力なのか、板屋町の魅力なのかわかりませんが、そんな事を凄く感じました。

第7号は「板屋町と廓細見」という事で、この取材、絵を描く事になった、その前にやっていた事をこの号でまとめました。板屋町というのはやっぱり花街というイメージです。ただそれをどうやって調べたら良いか資料がほとんどなくて、たまたま西尾の図書館の「岩瀬文庫」という所に行ったら『廓細見帳』というのがあって、その小冊子の中に板屋町の名前を見つけたんです。それは明治25年から大正5年までの古いものですが8冊ありました。ただ「岩瀬文庫」というのはコピーができないんですね。だから行くしかない。そこへ行っているいろいろな調べものをしたんですけれども、廓細見というのは遊里というか花街の案内書というもので、廓別に各店の芸娼妓の源氏名と本名と出身地、住所、年齢が書かれていて、名古屋のものは多少一人ひとりの特徴とか品定めの一文も付されているようなものだったんです。その板屋町の店の数と芸娼妓数と出身別と年齢別を、女房と一緒に行って、統計として。出身別で言えば名古屋とか三重県の地名が良く出てました。廓細見帳の中に「明けても暮れても変わらぬ務め、何の因果の苦勞性」という都々逸の文句があって、うちの奥さんが廓細見帳をめくった後に、編集後記の中で数知れぬ女性達の悲しい生き様というような言葉を書いていました。だからこの調べていくという事の中に消してしまった方が良いかもしれない、というような記録とか記憶というものが、ひょっとしたらあるのかもしれないと思いながら、ちょっと複雑な気持ちでこれを調べたというのが凄い印象です。取材としては「かんか

んばあ」といって当時、髪結業というんですかね、天野キクエさんという方がみえて、80歳になってたんですけれども、そのおばあちゃんから芸者さん達の髪を結う事の話色々聞かせてもらいました。天野さんは「御用があればいつでもやれるように髪結いの道具は揃えてあるよ。」って、ああいくつになってもそういう自分の職業というのか、それに対するきちんとした姿勢というのか、ああこれは学ぶものがたくさんあるなと思いました。

それから10号では「岡崎写生日記」という、岡崎の風景を20景選んでペン画のスケッチをしました。これはひとつひとつの町内を八帖、板屋、田町、魚町からずっとやっついていこうと思ったんですけれども、さっきの都市研究グループの話もそうですが、岡崎の町がどんどん変わっていっちゃうんですね。自分達が気が付いた所でもどんどん素敵な建物が壊れてしまうので、なんていうのかな、焦りみたいな、どっかこう全体的にどこでも良いから描いていかないと追っつかないんじゃないかという気持ちでした。それから調べものですよ。これは町内、例えば板屋町でも板屋町の中で人に聞くという事はなかなか難しいという事ですよ。おじいちゃんが息子さんの世話になるという事でいなくなっちゃったりとか、それから近所の話というのは、すごい言いにくいものもあるみたいで、取材が全然違う、本当に全く違う個人の昔話になってしまう事もたくさんあったりして、とって難しいなと思いました。だから、この時にいっぺんに岡崎全体のスケッチにしようとして切り換えました。最初やったのは国道一号線沿いの拡幅工事に伴う田町の建物です。取り壊された家の隣の家の壁面に青いシートがかけられて、これが何か僕はすごい印象的な色というか、青シートってそのものも仮の世界というのか、ああこういう世界がここに見えるようになったんだと思って。青いシートが町の中に出てきた雰囲気はとて何か自分の中では印象的な風景でした。それから古い建物が残っているのが井田坂ですね。今はもうないですけども郵便局があって、その玄関の屋根の上に日の丸と菊の花をあしらった鬼瓦があって、窓の棧が郵便局のマークになっているんですよ。えーっこんな凝った意匠が、こういう建物があるんだと思いました。それから今残っていますかね、井田又さんという料理旅館があって、入口の左側に瓢箪、右側に帆掛け船の付いた船がくり抜いてあって、屋根が青い色の洋瓦で壁面は黄土色で、中華料理みたいな何か模様がずっと描いてあって、多分文字は焼き物で作ったんですかね。何か本当に不思議な組み合わせの建物があって面白いなと思いました。それから「イガヤ百貨店」も描きました。そこは平屋建て百貨店で、僕たちは松坂屋とかオリエンタル中村とか、百貨店というイメージがだいぶイメージ付けられていましたから、これを百貨店というのはすごいなって、でも当時はそうだったんでしょうね。万屋さんからちょっと百貨店になった時期の、本当に百貨ですよ。だから衣料品とかセーラー服を着せたマネキンとか、軍手、シャンプー、洗剤とか塵紙とか日用品がいっぱい詰まって、ああこれを百貨店と言ったんだって思いました。それから「丸中商店」って古道具屋さんがありましたよね。屋根の本当に上の辺まで建具とか古道具を山のように積んであって、何が積んであったかとちょっとこの間絵を見たら、自転車、勉強机、カーペット、ベビーカー、戸棚、冷蔵庫、お釜、檜炬燵、ベッド、蒸籠などもう山のように家の前に積まれていて、本当にどこに住むの、どこが入口だろうっていうようなあれは本当に描いておいて良かったなって今思います。それから伝馬通りから康生通りにか

かると、「永田屋精肉店」と「糸惣紙店」。それから「ハヤカワ靴店」。伝馬通りのあそこの二階の窓にベケ印があって、きっとある時期硝子の強化に使ったんですね。幸貴堂というお菓子屋さん、それから康生の「竹村屋」さん、あそこも立派な銅板葺きですね。康生の辺りにすごくこう感じたのはアーケードがあって、アーケードの上というのはその下の世界とちょっとこうズレがあるんですね。アーケードの上にはひょっとしたら、はっきり分かりませんが、戦後復興意欲に燃えて造られた商店の気概の表れた町の形があって、おしゃれなんですよ。ところが下になるときっと改装されたんでしょうね。ちょっとこう近代的になった割には意欲がないというのか、何か寂しい感じのする、そんなようなちょっとアンバランスを感じた風景という事でここを描きました。それからモダン通りの「林弓具店」。それから石屋町に「鈴忠石工場」の展示場があって、軍人の石像とか狛犬とか置いてあったり、それから JR の駅前には「清風軒」、もう壊れましたね。「清風軒」の三階建ての建物とか、「富士盛」ですかね旅館があってそこを描いたりしました。この辺りの事は「のんき横町」ってちょっと入った所なんですけれども、河野筆助さんという 89 歳の魚屋さんのおじいちゃんがいて、その辺りに古く住まれている方で、国鉄駅が省線停車場って言われた時期があるらしいんですよ。その頃の家並図と思い出話をずっと聞かせていただいたんです。僕、一カ月前におじいちゃん話聞きに行くねと言って行ってなかったんですね。顔を出したらおじいちゃん病気になるって、待って待ってずっと待ってたんだって。それを僕が一カ月後顔を出したから良かったですけれども、とっても失礼な事をしたなって、あの時は取材したり、声を掛ける時は本当に気をつけなきゃいけないっていう事を教えられました。それから東岡崎駅前通り、ここは「明六堂」という古本屋や看板の出てない床屋さんがあったり、それから四連の屋根でコールトールの塗ってある外壁で「菊屋」さんという旅館があるんですけれども、何か印象に残ったんですね。それから「三龍社」の煉瓦造りの煙突、まだダイエーになる前にありましたね。僕はあれは中に入っても描きましたけれども、あれはどうしても残してほしかったものです。

5. 塩の道の旅

僕はその後岡崎を一度出てスケッチを始めます。それは岡崎の町で取材するという事も大事だけれども、岡崎の外から岡崎というものはどういう風に残っているんだろうかってちょっと思って、2つコースを考えました。東西交通の旧東海道か、南北交通の塩の道かと、結局南北交通の塩の道を選びました。それは三河湾の沿岸で採れた塩を川船に乗せて矢作川を上り、九久平まで運んで、それから馬の背に塩を乗せて足助まで運んで、足助で塩の品質とか量を整えて飯田の方まで運ぶんですけれども、このルートをたどりながら岡崎というものをもう一回見てみたいなって思って旅しました。旅のスタイルは軽トラックにスケッチの道具と布団と資料とたくさんのお酒を、きっと夜になったらガブガブ飲むんだろうなっていっぱい持って行ったんです。けれどもほとんど飲まなかったですね。それで 40 日間の旅をしました。旅ですから家を出た瞬間から旅人なんですよ。豊田市の、岡崎を出たところに神社があったんです。その境内でカセットコンロに鍋をかけ初めてお米を炊きましたね。芯があって本当に食べづらいようなものだったですね。そして初野宿というのがその近く巴川の河原のすぐ横に空き地があって、

岩倉という所なんですけれども、そこで初めて野宿しました。帰れば20分ぐらいの距離ですから帰った方が良いんですけれども、何か野宿してまでやるんだっていう、そんな気持ちでした。それから足助町にある足助屋敷の当時2代目の館長だった鈴木茂夫先生という方が、塩の道に詳しいからという事で足助屋敷に行って、そうしたら炭焼きの大山さんというおじいちゃんに、「どこに泊まるんだ。」って聞かれ、「探しているんだ。」って答えたら、「ここに泊まればいいじゃないか、館長に話して。」と言うから、それでその足助屋敷に泊めさせてもらいました。2、3泊したんですが、変わった奴が来たっていうんで、もういろりで宴会なんですよ。すごい温かいというか、ここは面白い町だなと思いましたね。有名であれば別ですよ僕が。こうただ来たというだけです。その時足助屋敷のパンフレットを作ってくれないかと、町で出会ったマンリンさんという本屋さんから絵はがきとかマップを作りたいと頼まれました。それで来年ちょっと仕事が出来たなと思いつつ、上に上がって行きました。絵を描いているとご飯おいでとか、泊まっていけとか、それから朝おにぎりを用意して下さったり、本当に温かい道でした。途中、僕の母方の親戚が稲武にあるもんですから、小田木っていう所では昔の馬宿をやっていた家があって、そこも親戚でそこで泊めさせてもらったり、やはり親戚のつた屋のおばあちゃんが、ちょっと木地屋の原田さんという人を紹介したいからというので、木地屋さんに連れて行かれました。そしたらそこのおじいちゃんの様子を見ていたら、おじいちゃんが「お前は何かをやらされている気がする。」と言うんですよ。意味がわからないし、言っている事もちょっとはつきりした事ではないんですけれども、原田さんの言った言葉っていったい何だろうなという事が、今のこのやっている事の支えというのか問いかけになっています。その後そこから別れてもっと北上して根羽小学校とか、阿智村、駒場っていう所で描いていたら、子供たちがダーッとやってきて、良くある事ですよ、子供たちが寄ってくるというのは。最初聞いたのは「おじさん有名？」って聞くんですよ。「有名でないよ。」と答えたら、「有名になるよ。」とか言ってね。要するにそこは熊谷元一さんという有名な人が出ていた町だから、やっぱり子供たちがその町で活躍した人がいるとそういうあこがれがあるんだなっていう、ああ子供にとって大人の生き方というのは大事だなってすごく思いました。それから飯田まで行って大沢和夫さんという人を訪ねました。昭和33年頃ですか、『中馬制の記録』という本を書かれた方で、中馬街道というものはつきりきちんとした形で記録に残された方の一人で、その方のアドバイスはいろんな意味で今でも残っています。

それで塩の道を終わって、その翌年は足助に行きました。足助屋敷の職人さんを描きました。機織りとか今屋とか下駄屋とか炭焼きとかいろんな職人さんがいますけれども、その中の下駄屋さんは岡崎の元能見という所で修行されたそうです。何か思い出があるかと尋ねたら修行時に6時頃、電車の音で起きて、7時になるとおかみさんが起きて、8時になると兄弟子が起きて、9時頃になると親方が起きてきたっていう、ただそれだけのことなんですけれども、そんな懐かしい思い出があるんだなという事。それから職人さんを描かせてもらった時に、僕は人物をペン画で描いたのは初めてだったんですよ。毎日一人ずつ描いてたんですけれども、職人さんというのはどうやって描こうかなと。上手じゃないですから、人が座っている範囲というのか、仕事場の後に人生訓があったり、それからカレンダーに何々酒店とあると、ああこのおじいちゃんはお酒飲む

だとか。それから道具の置き方とか、しまい方というのにその人の腕というのか、そういう力量というのが表れてくるかもしれない、職人さんの動ける範囲を描く事で絵になるかもしれないと思ってそれを描いた事。それから足助の中心街は細長いので、それをどうやったら足助らしい風景になるかなと思った時に、僕はいつも小さな四角い紙を持っているんですけども、セロテープをくっつけてまして、これを3枚つなげて描きました。初めて足助の町の通りをずっと長いパノラマで描いたのが自分の中で足助の町が描けたなと思った事なんですけれども、それからここで初めて鳥瞰画と言って小学校の屋上とか、高台のお寺に上がって描きました。細かい鳥瞰画は、展覧会をやった時に皆さん探すんですよね、自分の家とか、自分の知り合いの家を。そうすると話に花が咲くんですよね、凄い嬉しいというのか。それが自分がその後岡崎の鳥瞰画を描くきっかけになりました。

6. 岡崎鳥瞰画 - 10景

その後岡崎へ戻ってきて、ちょうど岡崎の市政70年という事で葵博をやっていた時です。僕は個人的に何か出来ないかという事で「文化史年表」を、ちょうど『岡崎文化』の編集もやっていたから、編集局の方達と一緒に岡崎の大正5年からの年表を半年間掛けて作りました。それからあと半年間は岡崎の鳥瞰画というものを、10景描きました。6月から11月、毎日朝7時前からずっとマンションとかビルの屋上に行って、夕方本当に暗くなるまでずっと絵を描いていました。スケッチブックと傘と腰掛けとジャンパーとおにぎり2個とお茶、クリップ、ガムテープ、ケント紙、0.2ミリのペンを使うものですから、ペンとシャープペンシルを持って描いていました。この半年間が多分、その時書いたんですけども、今までのうちで一番幸せな日々だったかも知れないです。メモにこんな事が書いてありました。「天と地の間に座って毎日太陽の動きと共に描き、感じ、太陽が西の空に沈むと共に終わる。夕暮れの西の赤く染まった色と、建物の青みがかかった世界との対比。振り向けば東は青く澄んだ空の色と赤く染まった建物の風景。一日を強く感じた。その中に人々の暮らしと町の形、川、丘、道、建物、時間、人の生死など。」僕はそれで岡崎の町はその後あんまり描いてないです。それはすぐこの後、「菅江真澄」という人を追っかけて、信州を越えて北陸に出てそれから東北、北海道へ行って、そういう旅をおよそ半年間ぐらいやったり、その時に出会った北海道の江差町という町で半年間余滞在して描いていたり、それから北海道の命名をした松浦武四郎という人が幕末の頃に蝦夷日誌という記録を残しているんですけども、松前という所から知床までの第1回目は太平洋側、2回目を日本海からオホーツクに掛けて海岸部をずっと旅しているんですけども、その跡をたどって絵を描いたり。また仕事で全国の農山村風景を描いています。それから利根川の上流から下流までずっと絵を描いたり、あとは名古屋市の広小路通がありますね、笹島の交差点から新栄町、片道3キロの往復6キロですけども、それを全部1軒1軒路上でずっと絵を描きながら、これはすごい時間が掛かったです。それはたまたま朝日新聞の夕刊全ページで掲載したんですけども、そんな事をしたり。この間は松坂屋さんの依頼で東京銀座の1丁目から8丁目の建物をずっと三越から松屋から和光からみんな40日掛かって描いてたり、そんな事を今までやっていて、あんまり岡崎に戻る事、いろんな経緯もあったもんですから描い

てなかったんです。けどもこの講演のお話があった事もありますけれども、去年の末から少しずつペン画ではなくパステルで、色で今岡崎の町のあちこちを少しずつ描き出しました。僕が好きな所というのか、今よくいる所は矢作川の河原ですね。特に琉球島とって、今ライダーのある所なんですけれども。名前も琉球島って、琉球の琉球島なんですよね。面白い小字名が付いているなと思うんですけれども、あそこはどん詰まりなんですよね。行ったら戻るしかない。何かね自分の気持ちがほっとするんですよね。戻ればいい。行きっぱなしではないっていう。すごい自分の心がそこでは落ち着くんですよね。それから岡崎公園にもいます。6本の銀杏の木のある所も好きですし、それからグラウンド、今は何も無いグラウンド。あそこも好きですね。それから東公園、大正から昭和にかけて文化活動をされた方々の歌碑とかそういうものがいろいろ残っていて、岡田撫琴さんとか、藤井達吉さん、近藤孝太郎さんの歌碑があったり、なんかちょっと古いものが好きなもんですから、そういう世界に浸る事が好きなもんですからそんな所。それから東公園からちょっと上がっていった所に、通称大正池という所があるんですけども、なにか池の中に立木があって本当にここは、秋の頃は陽が昇る前からよく行っていたんですけども、その朝の刻々と光が変化していく、風景が色が変わっていく本当に素晴らしいところで、こんなところが岡崎にあったのかという位、僕が今一番お気に入りの場所です。それから籠田公園も好きですね。あそこは座っているとこんな事をやって歴史を調べたおかげで昔の東海道のイメージが、昔こんな宿場町があったという、そういう人のざわめきがあそこに座っていると聞こえるんですよね。それから八丁味噌の裏の所に光円寺というお寺がありますけれども、いつも清掃されていて、すごく好きだなという風景です。僕はこの今、好きな風景と向き合っている時間がもっと多くなって、風景と語り合える気持ちがもっと深くなっていくと良いなあと望んで、今こういう風景の話をしていただきました。つたない話ですけども、どうもありがとうございました。